

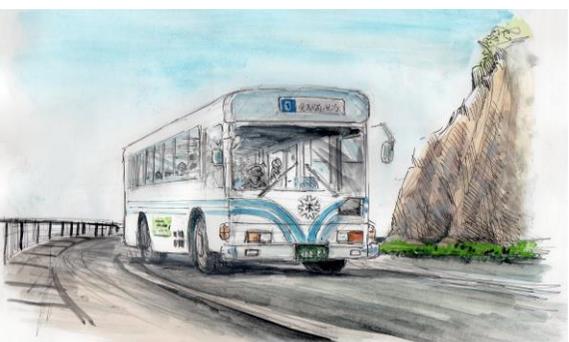
バスの中で

私たち大入地区の生徒は、毎日、バスで片道二十分かけて阿賀中学校へ通学している。その時間は私にとって、実に楽しい時間だ。

「おはよう！」

「おはよう！遅いじゃん！ねえねえ、昨日、あのテレビ見た？……」

バス停で待つ親友の英子は、私の顔を見るなり、マシンガンのようにしゃべり始める。それから、バスに乗り、バスを降りて学校に着くまで、私と英子の話は止まらない。クラスも部活も違う英子と私にとって、バスの中の時間は、とても貴重で、そして最高に楽しい友情タイムなのだ。それは、私と英子ばかりではない。他の中学生にとっても多かれ少なかれそうで、バスの中は、いつも大騒ぎになって、時々、バスの運転手さんに怒られてしまう。注意されるたびに少し反省はするが、これくらい大人たちには大目に見てほしいと私はいつも思っていた。



ある日のこと、私は風邪を引いたらしく、五時間目くらいから高熱が出てやむなく、早退することになった。阿賀駅のバス停の椅子には、いつもと違って、近所のお年寄り夫婦だけがぼつんと座っていた。おばあちゃんは、私を見るなり、心配そうに声をかけてくれた。

「しんどそうじゃね。風邪でも引いたんね。ここに座りんさい。」

そう言って、おばあちゃんは席を立った。いつもなら、遠慮するのだが、その時は本当にしんどだったので、私は甘えて、おばあちゃんがゆずってくれた椅子へ座り込んだ。やがて、バスがやってきて、私はやつの思いでバスに乗り込むと、一番前の座席に座り込んだ。おばあちゃんは、私を気づかうようにすぐ後ろの席に座って、「大丈夫かい。少しでも寝ときんさい。着いたら起こしてあげるからね。」

とやさしく声をかけてくれた。私はうなずくと、目を閉じて、体を休めようとした。しばらくたって、賑やかな声に私は目を覚ました。小学生たちが乗り込んできたのだった。

（そうか、この時間は小学生の下校時間なのか。）

そんなことを考えながら、私は再び目を閉じた。

けれども、とても寝ていられるような状況ではなかった。小学生たちのおしゃべりが耳について、それだけで頭痛がした。中には奇声を上げ、ふざけ合っている小学生もいた。リコーダーをふり回している男の子も見えた。

(いいかげんにしてよ。ここには病人がいるのよ！)

私はそう叫びたかったが、その元気もなく、ただ、いらいらしながら、じっと体を縮めていた。その時、後ろの座席からおばあちゃんの声が聞こえた。

「やっぱり、この時間もだめだねえ……。病院がもう少しはよう終わったらよかったのね。おじいちゃん、がまんしてね。」

私は、その声にはっとして、おばあちゃんが寄り添うようにしているおじいちゃんを見た。おじいちゃんも、しんどそうに目を閉じていた。

そう言えば以前、私達の登校時間にも、このお年寄り夫婦が病院通いをするために乗っていたことを思い出していた。けれども、いつからか姿を見なくなって、どうしたのかなと思っていたのだ。

「やっぱり、この時間もだめだねえ……。」

とつぶやいていたおばあちゃんの一言が、私の胸に突き刺さった。

私は頭の痛みも忘れ、意を決して立ち上がり、小学生たちをにらみつけた。けれども、私がにらんだくらいでは、小学生たちは気に留める様子はなかった。助けを求めるように辺りを見渡して、私は初めて気が付いた。そこには、教科書を広げている高校生、ノートを開いて熱心に書き込みをしている学生、じっと目をつぶって動かない会社員、本を読んでいる一般の方。小学生たちをちらちらと見ながら、みんな迷惑そうに顔をしかめている。その視線は私に向けられているような気がして、私は結局、何も言えずに座り込み、気の遠くなるような長い二十分間を過ごした。

「大丈夫？もう元気になった？」

次の日の朝、いつものように英子は元気に声をかけてきた。私の体は回復していたものの、いつものように話が続かなかった。バスに乗り込んだ私は、しばらくバスの中にいっしょに乗っている人たちを一人一人見渡した。

その様子を不思議そうに見ている英子に私は、ひそひそ話を始めた。

